

シカゴ学派都市社会学のアジア「親密圏」分析への応用可能性

Application of the Chicago Urban Sociology to the Analysis of Asian “Intimate Sphere”

西川知亨（京都大学高等教育研究開発推進センター 研修員）

【ねらいと目的】

本研究は、シカゴ学派都市・家族社会学を「親密圏」論の文脈で再解釈し、とりわけ後期バージェスの老年社会学等を中心とした基礎理論の検討をおこない、同時に応用可能性を追究することで、高齢化および「圧縮された近代」現象を経験してきたアジアにおける「親密圏と公共圏の再編」のための基礎理論の整理と整備を試みるものである。シカゴ学派の社会学者たちが分析したような、近代化と初期グローバル化にともなう（原初的）高度近代化の両方の過程が同時に進行し、高齢者の社会構造・心理的生活様式が危機に陥っている状況とは、現在のアジアの諸都市がまさに経験していることである。この意味で、アジア親密圏を分析するためには、欧米における社会学者がすでに取り扱い、分析している対象として、20世紀初頭のシカゴは重要な参照／比較対象となる。

そのなかでも、後期バージェスの老年社会学などに焦点を合わせる含意は、第1に、量的・質的、時間・空間の面などでの総合的な社会・家族認識を目指すバージェスの方法論上の意味である。第2に、バージェスが、コミュニティにおける家族研究をおこなっているという意味で、すでに「親密圏と公共圏」の再編成を目指し、生活圏の解体と再組織化を理論的に描いた重要な社会学者であるということである。第3に、近代化のみならずグローバル化の原初形態を経験していた当時の激動のシカゴが、「圧縮された近代」あるいは急速なグローバル化を経験している現在のアジア社会、およびその分析にとって、一つの重要なデータおよびモデル・ケースになるということである。

【活動の記録】

2009年1月21日

研究打ち合わせと討論 金城学院大学

2月12日

資料収集 米国カリフォルニア大学アーバイン校

2月13日

現役スタッフおよび名誉教授へのインタビュー調査および資料収集

米国カリフォルニア大学アーバイン校

2月14日

現地研究者（Ph.D.）との会合、および資料収集

米国カリフォルニア大学サンディエゴ校

2月15日

資料収集 米国カリフォルニア大学アーバイン校

2月26日

研究打ち合わせ 富山大学

2 月 27 日

シカゴ学派研究会 場所：富山大学経済学部 報告者：西川知亨

題目：「グローバル化の原初理論としてのシカゴ学派社会学」

【成果の概要】

アジア「親密圏」のなかでも「圧縮された近代」や「グローバリゼーション」の側面を強調するならば、あらゆる社会理論のなかでも、シカゴ学派社会学はいくつかの条件付きで、ひとつの有力な方法と視点を提供する可能性について示し得た。バージェスらのシカゴ学派社会学をグローバル化の原初理論としてとらえなおすことで、シカゴ学派社会学が、現在のアジア的状况にも似て、「近代化」と「高度近代化」の両方の過程が進む流動的な状況を描いていたことを浮かび上がらせた。とくに後期バージェスの老年社会学は、従来の表象における近代化の理論としてだけでなく、流動的社会における高齢者の居場所の確保および生活解体と再組織化に志向する、高度近代化の理論としての可能性を有している。初期シカゴ学派の社会学者が前提とした 20 世紀初頭のシカゴにおいて、「グローバル化」と「親密圏と公共圏の同時変容」が進んでいた。GCOE のプロジェクトがとらえる、「グローバル化」と「親密圏と公共圏の同時変容」とは、近代家族・市民社会・国家の三層構造が流動化しているのだということであるが、この流動的な過程が、20 世紀初頭のシカゴにおいて進んでいたことが示された。グローバリゼーション状況における所属構造の変動は「居場所」の流動化と結びつく。あらゆる個人は、社会的承認を得たいという動機を有しているのは、初期シカゴ学派の社会心理学が明らかにしてきた。バージェスも老年社会学の議論で示唆しているように、流動化する社会においては、近代社会において前提とされがちであった「職」のみによる自己同一化でなく、柔軟で多様な形態での「親密圏」と「公共圏」を交錯させたセーフティネットの構築が求められているように思われる。

なお、本研究の遂行にあたり、米国カリフォルニア大学アーバイン校・サンディエゴ校での文献収集・インタビュー調査、および富山・名古屋などにおいてレビューを目的としたインフォーマルなワークショップを開催した。